九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑紫に移り住んだ楊貴妃 : 『本朝水滸伝』の楊貴妃故事について

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/4972

出版情報 : 文學研究. 101, pp.63-76, 2004-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

KYUSHU UNIVERSITY

筑紫に移り住んだ楊貴妃

――『本朝水滸伝』の楊貴妃故事について――

竹村則行

【要　旨】

建部綾足『本朝水滸伝』後編に登場する楊貴妃は、その全体の構成や他の人物設定と同様、何とも奇抜な設定で読者の目を奪う。それは、安禄山の乱の渦中、馬嵬の変を危うくのがれた楊貴妃が、遣唐使藤原清川の帰国に伴って、日本は九州筑紫（福岡・佐賀）に移り住み、作品の主題である道鏡打倒に絡み、一派の阿曽丸暗殺に加担して失敗するというものである。

小稿は、中国や日本における楊貴妃故事の転変に関心を持つ筆者が、偶々居住する筑紫の現地から、『本朝水滸伝』と楊貴妃故事について考察しようとするものである。

『本朝水滸伝』後編の五条中に描かれる楊貴妃故事について、小稿では、その殺害描写、日本の異文化に接した楊貴妃、そして、楊貴妃が移り住んだ筑紫と作者自身の筑紫旅行との関係等の三つの方面から考察を加える。

まず、楊貴妃の殺害描写について、御車に侍った牛飼が貴妃を轢き殺そうとするその時に、叔父の楊蒙が貴妃の衣服のみを御車に轢かせて周囲を欺き、生身の楊貴妃を救出する場面が描かれる。『唐書』『通鑑』等の中国側史料には貴妃が馬嵬の変を生き延びたという記録はなく、楊蒙の存在も含めて、日本側の捏造と考えられる。（山口県油谷町の楊貴妃墓に纏わる貴妃東

渡伝説も、日本の熱烈な楊貴妃ファンの仕業であろう。）

次に、日本文化に接した楊貴妃が、女スパイになるべく、清川の周旋で日本語を特訓する場面があるが、そこに登場する唐詩や中国語には唐音の読み仮名が付いている。これは建部綾足が当時の唐話学ブームの中で理解していた中国音であると思われ、恐らくは福建語に近い中国南方音を反映したものと考えられる。

また、筑紫に移り住んだ楊貴妃の一行は、小舟で唐津や箱崎、香椎を移動するが、この地理設定は、『本朝水滸伝』には珍しく矛盾や出鱈目が少ない。それは、建部綾足自身が三十二、三歳時に大阪から長崎へ船旅をした途次に、筑紫路を経由した体験（紀行「浦づたひ」「花がたみ」）がここに反映しているからであろう。

こうして、奇想天外の出鱈目に溢れる『本朝水滸伝』ではあるが、嘘から出た真実、そこに描かれた楊貴妃故事を通して、江戸初期の中国学の実態や作者自身の筑紫旅行の反映等の真実を伺うことができるように筆者は考えるのである。

一　はじめに

江戸の文人建部綾足（一七一九～一七七四）の『本朝水滸伝』後編に登場する楊貴妃は、その全体の構成や他の人物設定と同様、何とも奇抜な設定で読者の目を奪う。それは、安禄山の乱の渦中、馬嵬の変を危うくのがれた楊貴妃が、遣唐使藤原清川の帰国に伴って、日本は九州筑紫（福岡・佐賀）の地に移り住み、作品全体の主題である道鏡打倒に絡み、一派の阿曽丸暗殺に加担して失敗するというものである。馬嵬で殺されたはずの楊貴妃が、実は生き延びて日本に亡命したという俗説は、夙に山口県油谷（ゆや）町にも伝わっており、そこには楊貴妃墓も現存して、町おこしに一役買っている。[1] 恐らくは、白居易「長恨歌」を主要な媒介として日本人の心の中に深く浸透した悲劇の美女楊貴妃への愛惜の念が、このような故事を生んでいるのであろうが、それにしても、筑紫に移り住んだ楊貴妃

が色仕掛けで悪玉道鏡打倒のテロ行為の一翼を担うという『本朝水滸伝』の設定は、虚構と知りつつも楽しい興奮を読者に与えるものである。まして、その筑紫の地に現在居住する筆者にはなおさらである。『本朝水滸伝』における楊貴妃故事はどのような意味を持っているのであろうか。作品中において筑紫界隈を転々とする楊貴妃の足取りは、果して全くの嘘偽りであるのだろうか。本稿は、中国や日本における楊貴妃故事の転変に関心を持つ筆者が、偶々居住する筑紫の現地から、『本朝水滸伝』と楊貴妃故事について考察し、報告しようとするものである。

二　『本朝水滸伝』における楊貴妃故事

まず、『本朝水滸伝』における楊貴妃故事は、次に掲げる後編の五条に集中して描かれる。以下、題目と共に、あらすじを紹介することにする。

第四十二条（巻二十一）　藤原の清川、楊貴妃をゐてひそかに筑紫に帰りすむ。

遣唐使の藤原清川は任終えて阿倍仲麿と共に日本へ帰ろうとしたが、あいにく船が難破して、二人は唐国の見知らぬ地に流れ着く。そこへ折良くやって来て、二人を手厚くもてなしたのが楊蒙、自己紹介によれば、その弟の娘が楊貴妃であるという。楊蒙が仲麿を都へ送り返し、数日すると、安禄山の乱が勃発する。噂では玄宗一行がこの道を通って蜀へ落ち延びられるという。楊蒙は少しも騒がず、一方で船出の準備をさせる。そして騒乱の渦中に牛飼いの手で殺害されようとする楊貴妃を偽って救い出し、清川の日本への帰り船に乗せる。船は幸いに日本・松浦の里へ着き、二人はそこに隠れ住む。

第四十三条（巻二十二）　清川、松浦の娘子に契る。并阿曽丸にちかづく。

松浦の里人となった藤原清川は海人風に能里曽（のりそ）と改名し、楊貴妃を妹と偽る。他人が聞き取れない楊貴妃の中国語については、彼女を吃病として周囲をあざむこうとする。清川は、松浦川の鮎釣りをよくする地元の娘を妻に迎え、貴妃の世話をさせる。やがてそこに、太宰府の豪族阿曽丸（あそまる）が行楽に訪れるが、道鏡、阿曽丸一派の打倒を目論む清川（能里曽）は、面白い物語をして阿曽丸に近づく。好色の阿曽丸が貴妃に惹かれたのを見た能里曽は、妹は不具で小便が不如意だとしてこれを故意に阻もうとする。

第四十六条（巻二十三）　楊貴妃、日本言を習ふ。并珠名が妻とゝもに阿曽丸につかふ

清川改め能里曽は、尾張熱田出身の珠名（たまな）とはかり、楊貴妃を阿曽丸に近づけて色仕掛けで彼を打倒するために、彼女に日本語を特訓する。そこへ、当の阿曽丸から船遊びの催促があり、能里曽は妹たる楊貴妃と珠名を伴って阿曽丸の遊行に伺候する。

第四十七条（巻二十四）　阿曽丸舟をうかめてたのしむ。并あやしき魚、阿曽丸をうかゞふ。

菊の高浜で船遊びをする阿曽丸は貴妃を近くに侍らせて楽しむが、船底にあやしい魚（人影）が見えたとして、急遽船遊びを中止して引き上げる。

第五十条（巻二十五）　清川が妻、珠名が妻とゝもに阿曽丸に殺さる。并珠名、楊貴妃をゐて熱田へ帰る。

清川らは、箱崎松原での舞楽の興行の最中に阿曽丸の暗殺を決行するが失敗し、清川と珠名の妻は阿曽丸に殺される。珠名は貴妃を連れて出身地の尾張熱田[2]へ帰ってゆく。

以上、『本朝水滸伝』後編に展開される楊貴妃故事を見てみると、その他の点綴された種々の故事と同様、全く史実によらない自由奔放で奇想天外な描写がなされているのだが、それでも、幾つかの点については考察を進める価値と必要があるように筆者は思う。次節においては、それを、楊貴妃の殺害描写、日本の異文化に接した楊貴妃、

そして、楊貴妃が移り住んだ筑紫と作者自身の筑紫旅行との関係、等の幾つかの要素に分けて考えてみたい。

三　『本朝水滸伝』後編の楊貴妃故事の考察

『本朝水滸伝』第四十二巻に述べられる楊貴妃の殺害描写は次の通りである。(3)

扨、冠よそひして大路に出て待に、みさきもはらはず、はつか五十人ばかりの軍兵、御車をかこひ、大路に引来り、臣等申て曰、「君、楊貴妃の色にめでたまひしより、禄山かくはかりて候に、いまだ貴妃をば捨給はず、御車を洞してめしたまひぬ。こはまたあるまじき事也。たとへ蜀の国を御頼ありて、めでたく御心に叶はせたまふ事有とも、又貴妃にめで給はゞ、ふたゝび天の下はみだれなん。さりとも天の下の民にかえて、そのひとりをめで給はんや」と、ことわりをのべて聞えさせたまふに、貴妃は御車をくだりて、「とにもかくにも、我故に侍らんには、いかで天の下の民にかへさせ給はん。我をば此所にうしなひ給ひ、大御心やすく、はやくおはします国へいでまさせて、天の下を治めさせたまへ」と、泣ゝきこへ奉るに、君は御こたへの御ことばもあらず。御車にさむらふ牛飼の者ども、「唯御心の残らざるさまに、貴妃が申せるごとくすべし」と、貴妃が手をとりて、御車の前輪にしきて、已に御車を引かけんとする時、楊蒙はしり参りて、牛飼が耳にかたり、「さすがに姪なれば、命をばすくはん。かれが衣の御車に引もぢれたるを見せ奉りて、「貴妃は馬塊が原の土となりし」と申きこえ、おぼしきらせたまふさまにはからふべし」とて、裙裳・羅帯をときすてさせ、我かたにおひて走りかへり、……

以上の引用文の前半では、〝君王が貴妃を寵愛したために天下が乱れた〟とする兵士達の直訴を受けて、貴妃も潔く自らの死を覚悟したが、御車に侍った牛飼が貴妃を轢き殺そうとするその時に、叔父の楊蒙が貴妃の衣服のみを御車に轢かせて周囲を欺き、生身の楊貴妃を救出する場面が描かれる。『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『安禄山事迹』「長恨歌伝」「楊太真外伝」等の中国側資料には、楊貴妃が馬嵬の変を生き延びたという記述はない。(4) 山口県油谷町には、やはり遣唐使の帰り船で楊貴妃が漂着し、この地で息絶えたとして、楊貴妃墓に纏わる伝説が残っている(1)が、いずれにせよ、「長恨歌」以来、日本人には稀有の美女として語り継がれてきた楊貴妃を、虚構を旨とする故事伝承や文学作品の中で、馬嵬の乱を生き延びさせ、事もあろうに日本へ転生の地を求めさせたのは、ヒロインの転生と不滅を切望する熱烈な日本の楊貴妃ファンの熱が昂じた結果であろう。

また、楊貴妃の命を救った叔父の楊蒙なる人物は、中国側資料には見当たらない。恐らくは作者の捏造になるものであろう。存在し得ない設定といえば、蜀へ蒙塵する玄宗一行が、藤原清川らの日本への出港地たる福建の海岸あたりを経由し、「爰は即蜀道にて、都にもほどちかし」とされる馬嵬において、楊貴妃の死のドラマが展開されるのは、何とも驚くばかりの出鱈目である。ただこれらの無頓着な設定は、『本朝水滸伝』の他の箇所においても頻見されるものであり、作品の特徴の一つでもあるのだが、それはそれとして、虚飾の事実は指摘しておきたい。

次には、第四十六条「楊貴妃日本言を習ふ」を中心に、筑紫に移り住んだ楊貴妃の所謂異文化接触について考えてみたい。もとより虚構の設定だとはしても、嘘から出た真実、筆者は、そこに何らかの考察に値するテーマが潜んでいると推察するからである。

『本朝水滸伝』後編に登場する楊貴妃は、藤原清川の妹という触れ込みで、身体に不具合を有する絶世の美女という設定である。彼女には、道鏡一派の土地の有力者阿曽丸を色仕掛けで籠絡し、テロ計画を実行するための女スパイとなるために、清川によって、急遽日本語日本文化の特訓が課せられる。楊貴妃が「那火来」(5)と言うのを、日本

語では、「火をもて来」「火をもて参れ」というのだと教えると、聡明な彼女はたちまち会得したという。又、彼女が気に入らぬことがあって、「呆子」[6]という罵語を口にすると、それは「馬鹿」といって下々の者が使う言葉だと諭すと、貴妃は恥じ入って二度と口にしなかった。更に第四十七条において、高浜の磯部で船遊びの最中、阿曽丸の所望で楊貴妃が霓裳羽衣舞を舞おうとする折しも、楊貴妃が「裙裳（キャンシャン）」「扇子（センツウ）」と口にするのを、介添役の藤原清川があわてて、妹（貴妃）の吃音病にかこつけて、「はかま」「あふぎ」と言い換えて、急場を取り繕ったという。これらは、むろん虚構物語の架空の設定ではあるが、それでも建部綾足が活躍した十八世紀半ばの江戸の唐話学習の実態がここに露呈していると見ることができるであろう。[7]

また、『本朝水滸伝』後編第四十六条には、楊貴妃が中国での生活を思い出して、李白の「清平調詞」の一節を唐音で口ずさむ描写がある。それには、

雲想衣裳花想容（ウンサンエシヤウハウサンヨウ）　春風拂檻露華濃（チヤンホンフカンルハノン）
若非群玉山頭見（シヤクヒキヤンヨサンテウケン）　會向瑤臺月下逢（エヒヤンヤウダイエヒヤウホン）

のように唐音の振り仮名がついている。この唐音がどれほど正確であるかはもとより期しがたい。所詮は虚構の物語であり、作者は今から四百年も前のこと、社会や時代の推移につれ、また一郷一村ごとに変貌する言語体系を推定して復元するのは甚だ困難である。しかしながら、あえてその傾向を類推すれば、この中国音は、福建の閩語を含む中国語南方音の方言に近いと考えられる。[8]石崎又造『近世中国における支那俗語文学史』二二二頁に、

（建部綾足は）平賀中南の交友であつたから唐音や白話小説の消息には通じてゐたに相違ない（学問捷径）。

の記述があるところからすると、先述の楊貴妃の中国語会話といい、この唐詩の中国音といい、建部綾足には相当の中国語力があったか、もしくは唐音への馴染みが深かったといえる。また、後述するが、若年の綾足が訪問した長崎の中国文化は、周知のように多く中国福建出身の中国人によって作られており、従って当時の当地の標準音は福建語であったことも、この音系推定の傍証となろう。むろん、この部分の描写は全くの虚構であるが、それでも、ここに〝嘘から出た真実〟を求めることは不可能ではないと筆者は考えるのである。

次に、『本朝水滸伝』後編における楊貴妃故事の特徴の一つに、海路から見た九州筑紫路という視点がある。藤原清川が日本へ帰国したのも当然船旅であったが、九州筑紫に帰り住んだ一行が松浦（現在の唐津）や箱崎、香椎（現在の福岡市東区）あたりを転々として船遊びをし、また箱崎の松原で妓舞を披露するのも、いずれもその移動手段は主に舟であり、その視点は常に海上から海浜陸地へと向けられているのである。このことに関連して、高田衛氏は「注目すべきはこれら西海の亡命者たち（引用者注：能里曽、男狭磯、珠名）が〝海人（あまびと）〟に身をやつしていることである。そこに中央集権に対する海洋民という対立の図式がほどこされている」[9]と指摘される。作品全体の構造を見通した氏の見解は説得的である。小稿では、高田氏の指摘を承けて、海路が一般であった当時の交通の実態がここに反映されていることを確認し、併せて綾足自身の筑紫旅行の体験がここに投影されている可能性について考察してみたい。

曽て瀬戸内海に跋扈した中世の村上水軍や、数度にわたる遣唐使の派遣、或いは鑑真東渡の例を挙げるまでもなく、陸上交通が相当に発達した近世においても、海路は交通の主要な手段であった。今日の高速道や新幹線、更には航空路の目覚ましい整備発展は僅々数十年間の異常事態であって、それ以前における輸送の主要ルートとして、

陸路に劣らず、海路が重要であったことを、ここであらためて銘記しておく必要がある。そしてその上で、先に梗概を述べたように、筑紫に帰り住んだ藤原清川や楊貴妃の一行が松浦（唐津市）、香椎（福岡市）、箱崎（福岡市）、菊の高浜（北九州市）界隈を船路によって移動する地理感覚について考えてみたい。寺島員章氏は、『本朝水滸伝』解説[10]において、その「舞台が本州・四国・九州にまたがるが、その多くの地が綾足の実際に旅した所である。」と述べられる。この指摘によって、本稿が対象とする『本朝水滸伝』の筑紫（北部九州）に関する地理描写について見てみると、実は次のように、建部綾足自身が曽て筑紫の地を主に海路によって旅行した事実がある。即ち、紀行「浦づたひ」「花がたみ[11]」によれば、以下の如く綾足の筑紫紀行が自身の筆によって記録されているのである（ゴチック字は『本朝水滸伝』に重なる地名）。

船の夢見ては驚く野分哉
野分猶はげしく、道あゆみ苦しくて**黒崎**にやどる。（略）**箱崎**の八幡にもふず。
箱崎や紐とく草の花もなし
廿四日、**太宰府**の御祭にこもる。（略）（以上、紀行「浦づたひ」）
唐津の松原を出て、浜崎とかいふ所にやどる。（略）けふも晴ず。**箱崎**のあたり近き何がしのもとにやどる。（略）此あたり利休居士の釜掛けの松となんいふあり。よりて見れば、
摘にさへ茶釜や掛て松の陰
（引用者注：**箱崎**）八幡にもふでゝ、此度ぞかへりもふしすらん。**香椎の宮**にもふず。神功皇后[12]いと平かに**箱崎**の御神なん産みたまへりと聞くに、
鳥の巣も椎やたのみて神の庭（以上、紀行「花がたみ」）

ここには、長崎へ西下、または長崎から東上する途次に、俳句を詠みながら筑紫を過ぎる建部綾足の面目が躍如として現れている。年譜[13]によれば、綾足は寛延三（一七五〇）年五月に大阪を出帆し、六月に伊予松山に着き、筑紫を経て、八月に長崎に到着している。また、翌宝暦元（一七五一）年二月に長崎を出立して、筑紫を経由して、三月に大阪に帰着していることからすると、先に挙げた紀行「浦づたひ」の筑紫西下時は寛延三年六月、同「花がたみ」の筑紫東上時は宝暦元年二月下旬ということになる。時に、綾足三十二〜三歳であった。

以上の事実から考えれば、『本朝水滸伝』後編において、藤原清川が楊貴妃をともなって、唐津―箱崎―香椎、また黒崎界隈を活動の主舞台としているのは、その若き日に作者の建部綾足自身が長崎への往復の途次において経由した筑紫の見聞や地理感覚がここに反映しているものと考えられる。そして、このことが、先に述べた海路から見た筑紫の描写の視点に直結するものであり、また、地理的に矛盾する記述が頻出する『本朝水滸伝』には珍しく、かなり的確で整合性のある筑紫の地理描写となって結果しているように思われるのである。

四　『本朝水滸伝』後編の楊貴妃故事の意義

『本朝水滸伝』は、命名上の原作たる『水滸伝』の筋を忠実に襲った所謂翻案物ではない。一名を『吉野物語』というこの作品は、むしろ『水滸伝』とは別個の作品と考えるべきものであるが、その後の〝本朝〟日本江戸での〝水滸伝〟を冠した作品群の火付け役となった功績は評価されるであろう。一見したところ、稀薄に見える『本朝水滸伝』の『水滸伝』襲用であるが、作品のモチーフの幾つかに『水滸伝』をヒントにしたらしい点を見出す事は可能である。それは、例えば『水滸伝』冒頭における〝伏魔殿〟から飛び出した百八人の魔王がやがて天に替わって正義を行うという設定が、『本朝水滸伝』においては、吉野の味稲翁が吉野川へ流した百本の柘枝が、やがて人間

となって戻ってくるという設定に似ていなくもないし、また『水滸伝』における高俅らの悪政にたまりかねた民衆が、宋江や盧俊義を中心に、梁山泊を根拠地として「天に替って道を行う」義挙の設定が、『本朝水滸伝』においては、道鏡や阿曽丸の横暴に対して恵美押勝や和気清麿らが伊吹山に拠って抵抗の秘策を練るという設定に構造上の類似を認め得ることからも髣髴される。李樹果氏は『日本の読本小説と明清の小説』[14]において、道鏡―高俅、高橋手力―宋江または戴宗、そして伊吹山―梁山泊の設定の類似を指摘する。これらの指摘は筆者も同意するものであるが、それにしても『本朝水滸伝』はあくまで〝本朝〟の〝水滸伝〟であり、文学風土を異にする中国と日本の文学史上において、ことさらに類似性を追求することはさほど意味を持たないであろう。

では、その中で、後編に設定される楊貴妃故事はどのように考えたらよいのであろうか。『本朝水滸伝』に登場する楊貴妃は、蝦夷の棟梁カムイボンデントビカラと共に、藤原清川の差配の下に、道鏡討伐勢力に加わる異色の存在として登場する。トビカラが東北日本の蛮夷を代表するとすれば、楊貴妃は西方中国の大唐国の妃として、色仕掛けの武器を用いつつ、共に打倒道鏡勢力の一翼を担うのである。結局のところ、清川にそそのかされた楊貴妃の阿曽丸（道鏡一派）暗殺は失敗し、楊貴妃は尾張の熱田へ移り住むところで、本作品における楊貴妃故事は終息する。この楊貴妃故事の持つ意味について、ここでは、小稿のまとめとして、日本に同化した異邦人という観点からまとめてみたい。

当然ながら、鎖国下の江戸時代においては、中国との公的交流は禁止されていたが、にも関わらず、或いはそれ故に、江戸文人のまだ見ぬ中国への憧れは一層昂じていたと考えられる。それには、平安時代―五山時代を通じての中国の文物制度の流入を継承して、江戸時代における中国書籍の輸入も大いに貢献したであろう。建部綾足が自ら長崎に赴き、また平賀中南等の中国通の文人と親しく交わったのも、これらの江戸期における中国熱の然らしむるものであった。

これらの背景の下で、『本朝水滸伝』に登場する楊貴妃およびその一族は、確かに異邦の中国人ではあるが、その実、日本人の心理をよくわきまえた存在として描かれる。例えば、楊貴妃の伯父にあたる楊蒙が中国にあって、遭難した藤原清川や阿倍仲麿を自宅に招いて懇切にもてなす場面、また筑紫に移り住んだ楊貴妃が「保証人」たる清川の周旋で日本語日本文化を学習する場面など、確かに楊貴妃は異邦人ではあるが、実は日本人から見て親しみの持てる、日本文化に馴染んだ〝異邦人〟として描かれている。言い換えれば、〝異邦人〟たる楊貴妃の扮装も演出も日本人が行なっているのであり、ここでの楊貴妃像は明らかに当時の日本人のフィルターを通して成ったものと考えられる。事情は、現在のように国際交流が頻繁に行われる時代ではなく、その逆に、鎖国という国家政策によって現実の交流が杜絶した中にあって、建部綾足が中国の文物をひたすら深く読み込んだ上に成った所業であることは、ここであらためて注目されてよい。例は異なるが、謡曲『白楽天』に登場して筑紫の漁翁と和歌・漢詩の交流をする白楽天や、日本人に早によく知られている諸葛孔明、はたまた古代の絶世の美女として知られる西施等も、個別の情況は同じではないが、その人物像形成の事情は同様であったであろう。ここに挙げた種々の人物像について、その当時の日本人は、当然ながら現地確認の機会を得ぬまま、書物資料の「深読み」によって、勝手に日本人好みの人物像を作り上げているのである。『唐詩選画本』[15]を見ても分かるように、江戸時代の詩文や絵画に描かれる中国人が専ら日本風であるのは、当時の時代情況からすれば、或いは致し方のなかったことかも知れない。

そうした中にあって、江戸時代において中国旅行が不可能であった建部綾足の中国認識が、例えば、清川や仲麿が流れ着いたと覚しき沿海の浙江や福建が、馬嵬を経由して四川に至る玄宗一行のルートに重なるという初歩的な地理誤認を犯しているとしても、本稿で指摘した通り、筑紫に移り住んだとする楊貴妃の移動ルートに基本的に矛盾がないことは、恐らく彼自身の若き日の筑紫旅行の経験による土地勘の然らしむるものであったことは、虚構の中に垣間見えた真実として指摘し得る。

こうして、『本朝水滸伝』における楊貴妃は、要するに藤原清川の道鏡討伐に利用された使い捨ての存在でしかなかったが、その描写を通して、建部綾足における、ひいては江戸期文人の中国認識の一斑が端無くも露呈しているように筆者には思われるのである。

注

（1）〝楊貴妃の里〟山口県油谷町に楊貴妃墓は実在するが、楊貴妃が馬嵬を生き延びてこの地に漂着したという伝説は、種々の情況からしても成立し難い。古代の土地の豪族八木（＝楊貴）氏の墓と混同したものという近江昌司氏説（「楊貴妃の漂白」毎日新聞夕刊、一九八六年一〇月七日）は有力である。楊貴妃墓の現場には今日も八木家墓が実在する。

（2）熱田神宮と楊貴妃については尾崎久弥『熱田神宮史料考』（大雅堂、昭和十九年）に詳しい。

（3）新日本古典文学大系本（同七九、岩波書店、一九九二年）を底本とした。以下同じ。

（4）拙著『楊貴妃文学史研究』（研文出版、二〇〇三年）参照。

（5）現代中国語の標準表記では「拿火来」。

（6）底本には「ガイツウ」とカナを振る。現代中国語の標準表記では「daizi」。むしろ「ダイツウ」の表記に近い。形近によるダ→ガの誤記も考えられるが、『漢語方言大詞典』（中国復旦大・日本京都外大合編、中華書局、一九九九年）二六五九頁によると、「呆」には福建の一部に「kai」という発音もある由。とすれば、綾足の中国語音が閩語に拠っていたことになる。これは、次に述べる「清平調詞」の中国語音の来源と共に、興味あるテーマである。

（7）建部綾足を含む江戸文人の唐話学については、石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』（清水弘文堂、昭和四十二年）に、豊富な資料に基づいた体系的な記述がある。

（8）音系の判断については、福建を含む中国南方出身の留学生を煩わせたほか、『全国主要方言区方音対照表』（中華書局、一九五四年）、『中国音韻学研究』（高本漢著、趙元任等訳、台湾商務印書館、一九八二年）所収「方言字彙」、『漢語方言大詞典』（中国復旦大・日本京都外大共編、中華書局、一九九九年）等を参照した。

なお、『唐詩選唐音』（劉道音、高田識訂、安永六年刊。六角恒廣編、不二出版、一九九八年『中国語教本類集成』補集所収）に輯録する「清平調詞」の唐音は、同様に中国南方音と思われるが、『本朝水滸伝』のこの部分と同様ではない。

参考までに、『唐詩選唐音』所収「清平調詞」に付された「唐音」は次のようである。

雲想衣裳花想容（イユンスヤンイ、シヤンハアスヤンヨン）
春風拂檻露華濃（チュンホンヘ、カンルウハアノン）
若非群玉山頭見（ジョヒイギインヨサンデウケン）
會向瑤臺月下逢（ホイヒヤンヤウタイエツヤアホン）

（9）高田衛『新編江戸幻想文学誌』（筑摩書房、二〇〇〇年）二〇七頁。

（10）『日本古典文学大辞典』簡約版（岩波書店、一九八六年）。

（11）『建部綾足全集』五（国書刊行会、昭和六十二年）、また『新日本古典文学大系』七九（岩波書店、一九九九年）所収。引用は岩波書店本によった。ゴチック字は引用者。

（12）原本は「神皇功后」と誤記する。

（13）『建部綾足全集』九「建部綾足略年譜」。

（14）天津人民出版社、一九九八年。原文は中国文。

（15）服部南郭考訂『唐詩選』に拠って、各詩に絵画と訳文を附したもの。七編三十五冊。嵩山房、天明～天保間刊。うち第六・七編は葛飾北斎画。そこには、中国への往来が不可能であった江戸文人が想像した中国の山河・城郭・庶民生活等の諸相が描かれており、唐詩、唐代社会のビジュアルな解釈として興味深い。出版の経緯については、村上哲見『漢詩と日本人』（講談社、一九九四年）二〇九～二一〇頁参照。